

旧鳥川小学校の思い出と 鳥川ホタル保存会の未来

鳥川ホタル保存会 会長 今泉 清



元鳥川小学校・現豊富小学校 教諭

竹内 謙作



〈今泉〉ご紹介をいただきました鳥川ホタル保存会の今泉でございます。どうかよろしくお願いいたします。本日はようこそお越しいただきました。鳥川というところをご存知の方もおりかと思いますが、ちょっと自己紹介をさせていただきます。

鳥川はいわゆる岡崎市の南東部に位置をしております。額田郡額田町でありましたが、平成18年に岡崎市の仲間入りをさせていただきました。これが山の上から鳥川の集落を眺めたスケッチであります。田んぼと山ばかりの小さな町であります。



スケッチ



とりかわ とっかわ
鳥川町 鳥川小学校

この写真の奥の方にちょっと建物らしきものが見えると思いますが、これが第二東名の建設現場でありまして、左方向にトンネル、そして右方向にもトンネルが入ってまいります。つまりトンネルを抜けてちょっと鳥川の地区へ出まして、またトンネルに入ると、そんな構図になっております。

先程先生の方からご紹介がありましたが、正式な地名は岡崎市^{とりかわ}鳥川町であります。ところが今年3月に閉校になりました鳥川^{とりかわ}小学校の正式な校名は、鳥川^{とっかわ}小学校であります。鳥川^{とっかわ}と呼んでいただいても、鳥川^{とりかわ}と呼んでいただいても結構であります。今日は先程ご紹介がありましたように鳥川^{とっかわ}で通させていただきます。

戸数が58戸程の小さな集落であります。周囲を山に囲まれておりまして、猿や猪や鹿が非常に元気であります。猿は30匹程くらいの群れを成しまして巡回をしてきてくれます。野菜を作っているおかみさん連中は、せっかく作った野菜を猿にごっそり持っていかれるので、カッカしております。しかしどうでしょうか。地球規模で考えてみますと猿も猪も鹿も私ども人間も運命共同体でありますので、私はそれ程カッカしなくてもいいかなと思っております。それでもおかみさん連中はおさまりませんのでカッカしております。どちらかというと猿のお裾分けを人間がいただいていると、まあこんな集落であります。

戦国時代は作手の奥平一族の支配下でありまして、奥平の4代目の貞勝の弟、次郎左衛門という人が城主をしておりました。城と言いましても城郭のあるような立派なものではなく、砦に近いものではなかろうと言われておりますが、その城主、次郎左衛門さんは天正3年(1575年)長篠の戦いに配下を連れて出向きまして、討ち死にをいたしました。



鳥川城址



城址に残る五輪塔など

従いまして、その戦死者の中には鳥川の者の名前も残されております。この城跡はちょっと小高い上の写真のようなところにありまして、現代でも五輪塔のようなものが残されております。

また昔からの風習も結構根付いておりまして、庚申講なんていうのが今も続いております。2ヵ月に1度の庚申の日に隣近所が集まりまして、庚申の掛け軸に向かってお参りをします。悪疫を調伏する。悪い災いから救ってもらおうという、まあそんなようなお参りでありまして、その日は例え夫婦の間でも男女の交わりは御法度だよと。だからお参りをしてちょっと一杯飲んで、寝ないで一晩を過ごす。今はさすがに一晩中はありませんが、ちょっと省略をして年に1回はみんなでお参りをしております。

こんな集落でありますので、馬頭観音とか地藏菩薩などの石仏も至るところにありますし、各家のかまどの神様を祀った木、これは屋敷にある木であります。荒神木と言ってあります。こんなものも多



ニンヤの猪垣



瀬長の猪垣

く残っております。昔はその根元へ古いお札やひな人形を納めておりました。

なお、田んぼや畑を荒らす猪を防ぐために江戸時代に作られたと言われております猪垣というようなものも残っております。これらは本日皆さまにお配りをしましたマップにも載っておりますし、鳥川ホタル保存会ホームページでも詳しく紹介をさせていただいておりますので、是非ご覧いただければと思っております。まあざっと自己紹介をさせていただきましたが、これが鳥川であります。

〈竹内〉続きまして私が「鳥川小学校と大きな古時計の数奇な運命」というお話をさせていただきます。鳥川小学校は平成21年度末で136年の歴史に幕を下ろしました。始まりは明治7年3月1日に宮崎学校、現在の岡崎市立宮崎小学校の分場として、慈徳院というお寺の本堂をお借りし、「鳥川学校」という名前で始まったと伝え聞いております。そして大正10年には現在の場所の小デノ沢に校舎を建てました。ここに門が2つ見えてますが、これは現在も残っております。大正時代からずっと変わらずに残っているんです。

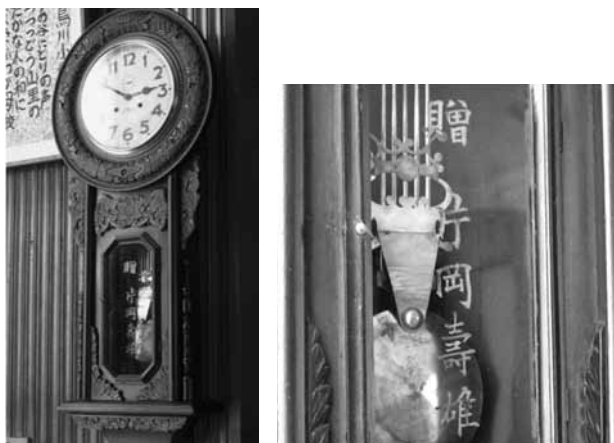


大正10年 小デノ沢校舎が竣工

ところが昭和18年2月8日、校舎が全焼してしまいました。火鉢の底が抜けていて、消したはずの火鉢から火がまわって火事になってしまったそうです。再び慈徳院を仮校舎として2年程過ごすことになりました。

その頃、地元の片岡寿一さんの息子さん、寿雄さんがお生まれになりました。お父さんは息子の誕生祝いと、いずれ息子は鳥川小学校にあがるということで、このような立派な大時計を給料の何ヵ月分かをはたいて購入され、鳥川小学校に寄付をされたそうです。戦争末期の混乱の中で、これだけ立派な物を寄付されたというのは本当に思いが込められていると思います。その後この時計はずっと校舎の玄関

に掛けられていたんですが、昭和39年に集会室が完成した時にこちらに移されました。



片岡寿一さんが息子(寿雄さん)の誕生祝いとして寄贈

実は昭和57年2月8日、再び校舎が全焼してしまいます。日曜日に行事があって、月曜日が代休日だったんですが、その代休日に火が出て、瞬く間に燃え広がって校舎が全焼してしまいました。この2月8日という日にちをちょっと覚えておいてください。先程のところへ戻ります。昭和18年2月8日。なんと2回の火事が全く同じ日なんですね。何かがあるのではないかとわれていますが、とにかく鳥川小学校では「2月8日は特に火事に気をつける日」ということで、毎年職員一同気を引き締めて最後の施錠をしておりました。

これが火事の時の写真なんですが、左側が校舎で右側が集会室です。先程の大時計はこの辺りに掛けられていたんですね。ギリギリまで燃えて集会室だけ辛うじて残ったということです。実は集会室の中にも火はまわりはじめていました。現在でも舞台の脇のはしごを登ると天井のところに焦げた跡が残っています。ギリギリのところで大時計は難を逃れました。



校舎は全焼してしまった
集会室はかろうじて焼け残った

平成9年度まで大時計はずっと現役として働いていました。ただやはり何十年も経てきますと、段々動きが悪くなってきて、直しても直しても遅れるよ

うになってきました。そして平成10年度にはついに電池で動く時計にとって代わられて、大時計は廃棄処分になってしまいました。

時代は流れ、平成18年度には全校児童が9名になってしまいました。いよいよ「もう学校としての適正規模を成していない」ということで、「平成21年度末をもって閉校」ということが決まりました。21年度、最後の年は全校児童6名が学んで鳥川小学校は歴史を閉じたわけですが、実はこの年、あの大時計がまだ残っているということが判ったんです。ある方が捨てるのは忍びないということで、大切に保管してくださっていたんですね。ただ大分傷んでいまして、飾りや振り子がとれたりして、随分傷みが酷かったわけです。そこでとにかく修復しようと、美合の時計屋さんをお願いして心臓部を直していただきました。周りの飾りは校長先生がせっせと校長室で研いて、ワックスをかけてみごとに修復させました。そして最後の年の2月末、「思い出と未来を語る会」で、元々あった場所に戻され、再び時を刻み始めました。見事に復活をしたわけですね。鳥川小学校は閉校したわけですが、実は「ホタルの学校」として生まれ変わることが決まっております。鳥川小学校は第2の人生を歩み始めるわけですが、大時計も「ホタルの学校」で「時をつなぐ時計」としてこれからも生き続けます。私たちはこんな歌を作りました。



大きな古時計が復活 再び時を刻み始めた

大きなのっぽの古時計 時をつなぐ時計
五十年いつも動いていた ご自慢の時計さ
寿雄さんが生まれた年に 買ってきた時計さ
今はもう動かない その時計
五十年休まずに チクタク チクタク
校舎といっしょに チクタク チクタク
今はもう動かない その時計

何でも知ってる古時計 時をつなぐ時計
二度目の火災に遭った時 その日も動いてた
嬉しいことも悲しいことも みな知っている時計さ



ホタルの学校で 時をつないでいく

今はもう動かない その時計
五十年休まずに チクタク チクタク
校舎といっしょに チクタク チクタク
今はもう動かない その時計

久々に目を覚ました 時をつなぐ時計
旅立ちの時がきたのを みなに教えるため
校舎を閉じる 鳥川小 新たな旅立ち
時を また つないでいく その時計
ホタルの学校で チクタク チクタク
校舎といっしょに チクタク チクタク
時を また つないでいく その時計

失礼いたしました。

〈今泉〉その古時計と一緒に私どもはいろいろな活動をさせていただいておりますが、ここで鳥川のあゆみを紹介させていただきます。私が小学校2年生の夏に終戦を迎えました。これは小学校4年生の時の写真であります。粗末な服装をしております。日本がおそらく一番貧しかった時代ではなかろうかと思っております。しかしよく見ますと、目だけは意外に輝いておるように見えるんです。何か新しい時代の夜明けを感じ取っていたのかも知れません。この写真を見るたびにそんなことを思っております。



小学校2年生の夏 終戦 (小学校4年生の時の写真)

そんな苦しい時代でしたが、毎年6月になると沢山のホタルが乱舞しておりました。家の中にもよく舞い込んできました。夜になるとみんなで誘いあって夜釣りに出掛けました。可哀想なことをしたんですが、ホタルを捕らえまして、針の先につけて川へポンと投げ込むんです。ホタルの灯がポッと消えるとサッとあげる。必ず魚が釣れてきました。



誘い合って夜釣りに出かけた
ホタルを針の先につけて…

それ程乱舞していたホタルであります。昭和30年代から40年代後半にかけて絶滅の危機に陥りました。ホタルの灯をほとんど見なくなりました。原因はなんだろうかと考えてみますと3つ程あるかと思えます。ひとつは私を含めて当時は環境に対する意識なんていうものは全くありませんでした。意識の低さといいますか、川にいろいろなものを流してしまった。それがひとつ。2つ目が、当時河川改修が盛んに行われはじまりました。今のよう機械を大々的に使うのではなく、手作業でやった改修でありましたが、やはり影響はあったのかなと思います。3つ目が、これが一番大きな原因だと思んですが、農薬の影響だと思っています。当時非常に強い農薬が出始めました。パラチオン系の殺虫剤が農薬として使われるようになりまして、それが川へ流れ出した。魚もいなくなってしまう。死の川になってしまいました。今考えてみますと、ホタルが自分の命を賭してこの水は危ないんだよということを私たちに教えてくれたのではないかな。この時初めて私どもも水環境の大切さを肌で感じさせてもらったということだと思っております。

それから農薬もだんだん改良されて、ホタルがポツポツ戻ってきました。そこで「昔のように沢山のホタルが乱舞する鳥川を取り戻そうじゃないか。」ということで、平成6年に小学校と一緒にホタル保存会を立ち上げました。

ホタルの命はやはり水でありまして、水の源は山であります。「それでは水の源である山や森にも関心をもつていただこうじゃないか。」ということで「ホタルの里の山歩き」、いわゆる登山道の整備を

10年程前から始めました。そうこうしているうちに、平成20年に環境省から「鳥川の水を『平成の名水百選』に認定したから、東京まで認定書を取りにいらっしやい。」こんな知らせが届きました。これにはビックリしたわけですが、当時の鴨下環境大臣から認定書をいただいてまいりました。



平成の名水百選
鳥川ホタルの里
湧水群



ホタルを通した水環境の
保全活動を高く評価

この認定は市から県、県から国へあげてもらいまして、国で審査をしていただいた結果であります。審査委員の先生の講評の中で「ホタルを通した水環境の保全を高く評価した」というお話がありまして、ここでも私たちとホタルとの繋がりを深く感じた次第であります。

この湧き水の群れを総称しまして「鳥川ホタルの里の湧水群」と言っております。現在5カ所程整備をいたしました。命が長らえる水「延命水」、庚申様の御利益の水「庚申の水」、大岩の下から流れ出ている「大岩の水」、昔は産湯に使っていた「産湯の滝」、それからもうひとつ「ふないどの水」、この5カ所です。「ふないどの水」にはこんな句碑が建っております。

岩しほる
水のうまさや
鳥川路



ふないどの水



おそがかった
鷹見先生の句

これは昭和20年代に鳥川小学校の校長さんをしてみえた鷹見という先生が、久しぶりに鳥川を訪ねた折に思わず詠まれた「句」だそうです。私もこの

先生に教えていただいたんですが、おそがい校長先生でありました。椅子に座ってみえて、怒ると足が段々震えてくるんです。続いて「コラーッ」と一喝が出ます。本当におそがい校長先生でありましたが、やはり鳥川を愛してくれていたんだと、そんな思いがしております。

鳥川は周囲が山でありますので、水はどこからでも湧き出ています。私が中学生の頃は、小銭を稼がせてもらうために休みの日は決まって山仕事をしました。真夏なんか朝一升瓶にお茶をもらっていくんですが、2時間くらいで終わっちゃうんです。あとは一升瓶に山水を汲んで飲みました。1日三升くらい空けちゃいました。夏休みはそれが毎日でした。腹痛も下痢も1回も覚えがありませんので、鳥川の水をどうぞ皆さん生で飲んでいただいても大丈夫であります。ただ、環境省の方からのご指導で「この水は自己責任でお飲みください」という立て札が立ててあります。この立て札はちょっと余分じゃないかなと思うんですけども。私どもにいたしますと、身をもってこの水は絶対大丈夫だよという体験をしておりますので、水に水を差されたかな、そんな気持ちであります。が、これはちょっと環境省の方には内緒にしておいてください。

この水は飲用を保証する
ものではありません。
使用する場合は、自己の
責任でお願いします。



水に水を差されたかな…

この水であります。昨年鳥川にお越しいただいた名古屋大学の吉田先生によりますと、15年から20年、いやもっとそれ以上に長い長い年月をかけて地上に湧き出てくる水もあるそうです。ひょっとしたら私が生まれた頃に地下に浸み込んだ水がこの水かもしれない。そんなことを考えて飲みますとコップ1杯の水の中に長い歴史が詰まっているわけでありまして、ちょっと襟を正して飲まなきゃいかんかなと思いますけれども、申し訳ない、いつもガブツと飲んじゃっております。

また最近ポリタンクを沢山車に積んで水を汲む方が大勢おみえになります。岡崎市の水道局の宣伝をさせていただきます。岡崎市の水道局で「額田仙水」というボトルを出しておみえになりますが、あれは鳥川の水であります。どうか機会がありましたら

非一度ご試飲をしていただけたらと思っております。

〈竹内〉続きまして「鳥川小学校のホタル保護活動の歴史」についてお話をさせていただきます。実は平成20年度の「こどもホタレンジャー」で、鳥川小学校は最優秀「環境大臣賞」をいただきまして、斉藤鉄夫環境大臣より表彰状を受け取ってまいりました。そして最後の年に「特別賞」をいただいて、小沢環境大臣より賞状を受け取ってまいりました。最後の2年で大きな賞をいただいたわけですが、ここに至るまでには30年以上前からホタルの保護活動に取り組んできたという長い歴史があります。

これは昭和58年の新聞記事ですが「岡崎市の美合小と額田町の鳥川小が交歓会を開いて幼虫を放流した」という記述があります。そしてよく読んでいきますと「5年程前から美合小も鳥川小もホタルの保護活動を始めた」とあります。つまり昭和53年頃からそれぞれのホタルの保護活動がスタートしたことが判ります。当時はホタルの幼虫の餌であるカワニナを調査したり、幼虫を育てて放流したりという活動を中心に行っていました。



カワニナの調査や幼虫の放流を中心に活動
(昭和58年8月24日 中日新聞)

私自身は平成16年度に鳥川小学校に赴任をしたわけですが、5・6年生の担任として、子どもたちと一緒にホタルをテーマにした研究を行いました。人数が少ないので1人ずつテーマを決めて取り組みました。この写真の小野君は「ホタルに関わる食べる食べられる関係」という研究をしました。学校の裏に元気池という水槽があるんですが、ここでホタルを大量に育てて、どんどん放流して増やそうという計画を立てたわけです。けれども調べていくうちに、どうもそういうわけにはいかないぞということに気がついたわけです。調べれば調べる程、ホタルだけ増やそうとすると結局最後は全滅してしまっただけで増えないということが判ってきたわけです。私も養

殖すればどんどん増えるだろうと勝手に思っていたんですが、実はそうではないということを初めて知りました。「ホタル」だけに注目するのではなく、もっと違った視点からやっていかないといけないと学びました。



ホタルに関わる「食べる食べられる関係」
ホタルだけ増やそうと思っても失敗する

この年は、学区の方々にホタルに関するアンケートを実施しました。集まったアンケートの中に「もっと山に目を向けないといけない。山の植物や生き物にも注目すべきである。」という意見がありました。「ああ、なるほど。やはりホタルだけではなく、もっと視野を広げないといけないんだな。」ということで、新たな取り組みがスタートしました。

まず人工林と自然林の割合を調査することから始めました。人数が少ないものですから自分の車に子どもを乗せて鳥川のあちこちを回って、「ああ、ここは雑木林だね。ここは植林がしてあるね。」と、地図に色鉛筆を使って塗り分けていきました。するとなんと7割から8割が人工林であると分かりました。しかもほとんどの場所が手入れされずに、非常に薄暗い状態でした。地面に他の植物は一切生えておらず、荒廃が進んでいることがよく判りました。

理科の時間にこんな実験をしました。山に入ると固い土の層「表土」の上にふわふわの土「腐葉土」が乗っているんですが、その両方をバケツに取ってきて、このように2つの溝を作りました。こちらが表土、こちらが腐葉土です。そして上から水をジャーッと流しました。すると見事に結果が違いました。表土の方は表面を水がサーッと流れて、下に泥水がすぐに溜まります。腐葉土の方はどうかといいますとペットボトル1本流し終わっても全く変化なし。2本目を流して4リットル終わる頃に下の方からチョロチョロと水が出てきました。その水は無色透明、全く汚れはありません。ということで、表土と腐葉土の働きの違いというものを目のあたりにしました。いかにこの腐葉土が大事かということが、この実験でも判ると思います。やはりスギやヒノキだけ植わっていると葉っぱが落ちないので、段々雨で腐葉土が流

されてしまうわけです。腐葉土が薄くなって表土がむき出しになると、洪水が起きやすく、保水力もどんどん下がっていくということだと思います。



腐葉土層の働きを実験で確かめた

こんな取り組みもしてみました。鳥川には水源の山があります。この山から流れ出した水はどんなふうに流れていくのかを確認するために、鳥川から男川へ、男川から乙川の方の乙川へ、それから乙川から矢作川へと、どんどん合流点を下って調査をしました。そして最後、碧南の河口で、山と海が繋がっていると実感しました。この調査で川の水が一番汚かった場所、それはどこかということ、乙川と矢作川が合流するところなんですね。河口ではないんです。乙川と矢作川の合流点には、ゴミが本当に沢山あって、水質検査をしてみても一番悪い数字が出ました。



鳥川から男川への合流点



男川と乙川の合流点



乙川から矢作川への合流点

みんなでバスに乗って川探検に行った

ということは私たち乙川流域に住んでいる者が、もっともっと気をつけなきゃいかんということを学びました。子どもたちも「鳥川でゴミを落としたらここにくるんだよね。」と、自分たちがもっと気をつけなきゃいけないということを肌で感じることができました。

それから、とにかく山に目を向けなければいけないということで、「矢作川水系森林ボランティア協議会」の方たちをお願いをして「森の健康診断」をしました。



矢森協（矢作川水系森林ボランティア協議会）の協力で「森の健康診断」を実施

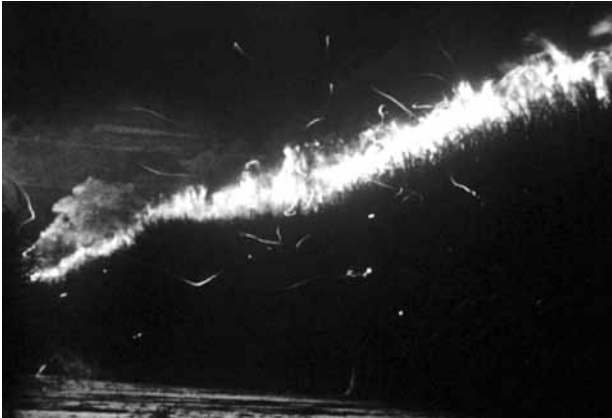
木と木がどれぐらい混み合っているかということを調べたわけですが、とにかく鳥川の山は超々混みすぎ状態であるという診断が出ました。半分以下に間伐をしてもまだまだ大丈夫ということが判りました。

このような取り組みをしていく中で、山歩きコースの整備も同時に進めていきました。そして、「山と溪谷社」に売り込みをしまして、取材をしていただきました。このような形で全国に紹介をしていただいたものですから、秋田県とか、ものすごく遠くから鳥川の山を歩きにきてくれるようになりました。今年の3月には山と溪谷社から「愛知県の山」という本が出版され、ここにも京ヶ峯・音羽富士ということで、鳥川の山歩きコースが紹介されました。これでまた一気に火がついて、最近は本格的な装備をした方が山にどんどん入って歩いていただいております。



山歩きコースが完成
「山と溪谷」で全国に紹介
きれいな水を生み出す
豊かな山をつくろう

最後の年には、こういった取り組みをしました。「ホタルの光害」。実は人工の光というのはホタルにはとても悪い影響を与えるということだそうです。



ホタルの光害(ひかりがい)対策 人工の光はホタルにとっても悪い影響を与える どうしたら光害を減らすことができるのか

この写真はホタルを見物にきたお客さんが出している光が、これぐらい帯に繋がっているという写真なんです。ホタルは人間と違って光と光で会話をしているそうなんです。光ることによって雄雌が互いに存在を知らせあって、そして生殖活動に繋がっていく。ところがそこに人工の光が入りこんでくると話ができなくなってしまう。例えば人間が喋っている間に近くでワーワーガーガーうるさい音がすると話ができなくなってしまうよね。それと同じでホタルにとっては光がくることによって会話ができなくなってしまう。特に最近広まってきたLEDの光、LEDの黄色っぽい光がホタルにとっては一番苦手そうで、その光が常時当たっているともうホタルは一切卵を産めなくなってしまうそうです。ですので、水銀灯にせよ、ヘッドライトにせよ、懐中電灯にせよ、ホタルがいる場所に光を持ち込むというのはホタルにとっては非常に酷なことであるということが、最近の研究で判ってきました。

そこで子どもたちと一緒に「じゃあ、どうしたらいいんだろうか。」と考えました。年々鳥川も有名になってお客さんが増えていますので、「このままでは人間のせいでホタルが減っちゃうぞ。どうしたらいいんだ。」と考えました。ある場所ではこんなことをしています。ガードレールに黒いシートを貼って、ヘッドライトの光が川に入らないようにしています。確かにこれで光は防げますが、非常に見栄えがよくないですね。この黒いシートが延々続いているというのが。じゃあ鳥川の場合どうしたらいいんだということを子どもたちといろいろ考えて、辿り着いた結論がこれです。「アジサイ」です。アジサイはちょうどホタルのシーズンに花が咲



ガードレールに黒いシートを張って 光害を防いでいるところがあった

きます。葉っぱが大きくしげってくれます。ガードレールの脇に光を遮るブロックとしてアジサイを植樹すればいいんじゃないかと考えたわけです。保存会の会長さんにもお願いをしまして、皆さんと一緒に170本ほどのアジサイを200メートルに渡って植えました。1年経ってだいぶ大きくなっていますが、これからどんどん増えていくと光害を防ぐひとつの手立てになるのではないかと考えています。

こんな取り組みを鳥川小学校最後の年にやりました。これが記念写真です。ここに映っている6人が鳥川小学校最後の児童6人です。当時6年生だった圭貴君は額田中学校へ進学し、他の5人の子どもたちは豊富小学校に転入いたしました。私もおまけでそこについていったわけですが、子どもたちは皆んな元気に頑張っております。



さらにアジサイを増やしていきたい

つい先日、生物多様性に関する国際会議COP10が名古屋で開催されました。実は私たちが取り組んできたことはまさしく「生物多様性」です。そういう言葉は知らなかったんですが、取り組んできた内容は「生物多様性」そのものです。下草が山にいっぱい生え、腐葉土が戻り、豊かな水が流れて、ホタルはもちろん他の生き物も沢山住めるようにしていきたいと願っております。

写真の真ん中にトヨトミナシという梨が映っています。これは市の天然記念物で、実は世界中でここにしかない貴重な野生梨の一種です。このトヨトミナシを中心として様々な動植物が鳥川には生息していますが、これらのものがこれからも豊かに生きていけるような、そんな鳥川にしていきたいと考えております。



ゲンジボタル



ヒメシャラ



トヨトミナシ



イワカガミ



ナガレホトケドジョウ



シリブカガシ

すべての生き物が豊かに生きていける鳥川に

先程も申しましたが、学校としては無くなったわけですが、岡崎市のホテルの学校として復活することが決まっております。これから準備を頑張っていきたいと思っております。

この写真は毎年行っている田植えの風景ですが、子どもとおじいちゃん、おばあちゃんが一列に並んで田植えを行っています。このように皆んなに自慢できる故郷であり続けたいと願っております。



田植え

〈今泉〉子どもたちの活動を皆さんに紹介をさせていただいたんですが、じゃあ後世に、後の世まで伝

えたい鳥川の気風っていうのはどんなもんがあるのかな、ちょっと紹介をさせていただきます。昔の話で恐縮ですが、鳥川には手間借り、人手を借りるという意味ではありますが、そのような風習がありました。病人が出たような家があると隣近所の者が田植えや稲刈りを必ず手伝いにきました。誰が言い出すでもなく、皆んなが自然にそうなくなりました。昭和30年代までは茅葺きの家も沢山ありまして、一定の時期がくれば茅を葺き替えなければなりません。蓄えてあった茅を使って何日もかかって作業をするわけではありますが、これも隣近所総出で助け合いました。それから大雨や台風がきますと今のように整備をされておきませんので、道路が崩れたり、橋が流されたりしました。そんな時は村中総出で山から木を切ってきて橋の付け替えもしました。これはみんなで山から薪を背負い出しているところの写真です。学校かあるいは集会場を使う薪なんですか。みんな一生懸命に頑張っております。鳥川というところは地理的にちょっと離れ小島でありまして、そういうところからお互い助け合って、自分たちのことは自分たちでしよまいか、そんな気風が育ってきたのかもしれない。



みんなで山から薪を背負い出している
お互い助け合って、自分たちのことは
自分たちでしよまいか。

そのような気風は幸いなことに今も残っておりまして、例えば川の草刈り、それから県道や市道の草刈り、登山道の整備、閉校になってしまった小学校の管理、全て協同作業でやっております。今は組織も仕組みも全然違うんじゃないのと言われてそれまでですが、みんなのためにみんなで助け合ってやっていこう。この気持ちというのは、社会を構成していく上で今も昔も変わらない基盤ではなからうかと思っております。岡崎市にお住まいの方が多いと思いますのでご存知の通りですが、岡崎市は今、市民協働、協働というのは協力して働くという字であります、市のひとつのテーマになっております。行政と市民が協力し合って

自分たちの町を作っていこう。あるいはみんなが協力し合って自分たちの地域を作っていこう。そしてその素晴らしい風土を後世へ繋いでいこう。まあこういうことではなかろうかと思っております。先程から話が出ておりますように、鳥川小学校も最後は6人だけという寂しい学校になってしまいましたが、先生方は地域と一緒に子どもを育てていこう、地域と一緒に学校を育てていこうという姿勢を貫いてみえました。また地域の者は学校と一緒に子どもを育てていこう。子どもと一緒に地域を育てていきたい。こんな思いを常に抱いていました。この気風は鳥川小学校136年の歴史の中で最後まで微動だにしませんでした。私たちも一緒に歩んできた鳥川小学校の歴史を感謝の気持ちを込めて、もう一度見直してみたいと思っております。



学校は「地域といっしょになって…」
地域は「学校といっしょになって…」

〈竹内〉後世に伝えたい、私たちの母校。鳥川小学校は閉じてしまったわけですが、やはり小さな学校だからできることというものが確かにありました。この写真は閉校記念の大運動会で、一輪車ドリルを全校児童で演技しているところです。



小さな学校だからできること
閉校記念 大運動会 一輪車ドリル

全校での演技の他に、一人一人が運動場の真ん中に出ていって、今年取り組んだ成果を全員のお客さんの前で披露することも毎年行ってきました。全校何百人の学校では絶対できないことです。子どもたちは大きな拍手とともに「やりきったぞ」という大きな満足感を得ておりました。これは閉校記念の学芸会の「虹色ほたる」の1シーンなんです。6年生の圭貴君と私が舞台に上がっています。



閉校記念学芸会「虹色ほたる」
この学校にしかできないこと

私も毎年舞台に上がっておりましたが、私だけではありません。全職員、保健の先生も事務の先生もみんな舞台に上がって、子どもたちと一緒に約1時間にわたる劇を披露してきました。そんなことも小さな学校だからこそできたことだと思います。よく小さな学校だと競争心が育たないと言われますが、そんなことはないかと確信しています。子どもたちは本年度豊富小に編入し、小さな学校から大きな学校へかわってどうかと心配をしていました。でも、今豊富小学校で鳥川出身の子たちはとても頑張っていて活躍しています。一人一人が自分自身のやるべきことがちゃんと判っているということで、決して大きな学校に負けただけの力を身につけています。小さい学校で育ったから駄目だなんていうことはないと思身をもって体験しております。

平成21年度、最後の年は、ケーブルテレビのミクス、今日も後ろで撮影をしてくださっていますが、ずっと取材をしてくださいました。その総集編が今年の4月に1時間番組として流されました。今から、そのほんの一部を皆さんにご覧になっていただきたいと思います。きっと鳥川小学校の雰囲気が肌で感じていただけるんじゃないかなと思います。

〈映像〉

ありがとうございました。今見ていただいた通りで、子どもたちとあらゆることを一緒になって

やってきたというのが鳥川の姿であります。こんな小学校がなくなってしまうというのは本当に寂しい限りですが、ここで培ってきたものは大きな学校に行ってもやっぱり同じかなと思っています。今5年生40人を担任していますが、子ども一人一人を伸ばしていきたいと考えています。そんなことを鳥川の6年間を通じて学ばさせていただきました。

〈今泉〉どうもハゲ頭が何回も出てきまして申し訳ありません。それでは私たちは小学校の意志を引き継いで、活動か思いをどう発展をさせていったらいいのかなということでもあります。いま、日本の人口は減少方向に向かいつつあります。近い将来1億人を割り込むのではなかろうかと言われております。そうしますと、ひょっとしたら無くなってしまう集落が出てくるかもしれない。その仲間入りをしないためにはどうしたらよいのか。これは私どもも含めまして、山間地の小さな集落が持つ共通の課題ではなかろうかと思っております。皆さんご存知かと思いますが、名古屋に大須という町があります。



名古屋の大須 大須観音の門前町

大須観音の門前町であります。私は昭和32年に学校を出まして名古屋へ勤め始めました。その当時大須は大変賑わっておりまして、仁王門通とか万松寺通、赤門通等の商店街があるんですが、どの商店街も賑わっていました。昼間だけでなく夜も賑わっていました。夜の顔は歓楽街であります。私もよく酒を飲ませていただきました。ところが昭和40年代に入りまして夜も昼も段々静かになってきました。大須はよかったね。賑やかな街だったね。楽しかったね。よかったね、だったねの街に変わってしまいました。大須はもう駄目になってしまうな。みんながそう思いはじめました。その時、5～6人の男が鉢巻を締めて立ち上がりました。小さなイベントのようなものをコツコツと立ち上げはじめまし

た。そこへポツポツと飲み屋のママさんたちも加わりはじめました。商店街の親父さんたちも仲間に入りはじめました。そんな輪が大須の町に段々と広がりはじめました。このようなことが数年続くうちに、不思議なことにお客さんがぼちぼち戻りはじめました。ちょっと活気が出はじめました。大須の町の中にみんなが共有する目的が芽生えたということではないでしょうか。それからアメ横がきたり、地下鉄の駅ができたり、よい条件が重なりまして、今また大須は賑わっております。



アメ横ができたり、地下鉄の駅ができたり
今はまた大須は賑わっている…

私はいつも「町おこし」という言葉を聞きますと、鉢巻を締めて男たちが立ち上がった大須の町を今でも思い出します。ホテルもありました。山歩きもありました。名水もありました。ありましたになってしまっは終わりだと思っております。ホテルもありますよ。山歩きもありますよ。名水もありますよ。常にありますよでないと地域として生きていることにはならないわけであります。私ども保存会は、正直申しまして小学校におんぶにだっこの保存会でありました。これから独り立ちをしていかなければなりません。さあどうしたらよいのか。地域内の連携、これはまあ当然なことでもあります。組織の強化、これも当然なことでもあります。しかし1番大事なことは、来ていただいた皆さん方の「思い」を感じ取ること。「息づかい」を感じ取ること。そしてそれを活かしていくことではないかと思っております。この中からやはり「ホテルの里 鳥川」のネットワークも広がっていくのではないかなと、こんなふうに思っております。水環境の保全ということは、私ども川の源流域に住む者の務めだと思っております。それをもっと確実なものにしてしっかりと次の世代へ引き継いでいかなければならないと思っております。ホテルを原点とした、このような活動にどうか皆さま方のご指導やご支援を切にお願いを申し上げます。



偶然の出会いを一生の宝にして…
想いを集めれば必ず大きな力になる！

〈竹内〉終わりに「偶然の出会いを一生の宝にして」と書かせていただきました。今泉さんとの出会いというのも偶然なんです、実は今泉さんの息子さんとは、中学校の時に先輩後輩の仲でした。しかも同じ剣道部で一緒だったというつながりがありました。鳥川小学校に赴任をした時、清さんのお孫さんが鳥川小学校に入学をして6年間一緒に過ごして、5年生で担任をし、そして最後の年には弟の、今後ろにいる利陽君を担任しました。ということで、今泉家とは本当に清さんからお孫さんまで、三代にわたってつながりがあるわけです。ですから偶然なんだけどやっぱり、人間は偶然の中に必然のようなつながりがあるのかなと私は実は感じています。今日ここにきていただいた皆さんとも偶然の出会いなんだけれども、どこかでなに

かつながっているんじゃないかなと、そんなことを感じております。なかなか人口の少ない小さな町ですので、自分たちだけで支えていくのは難しいわけです。ですからネットワークをどんどん広げて鳥川のふるさとファン、鳥川を愛する人たちを増やしていくことが1番大事なと考えております。「想いを集めれば必ず大きな力になる」と書きましたが、いろいろな方のいろいろな思いをひとつに集めていくと力になっていくと信じております。今日も教え子たちが何人も応援に駆けつけてくださってますが、大人ももちろん、これからの時代を担っていく子どもたちにこんな思いを感じ取ってもらえれば、きっと大きな力になっていくんじゃないかなというふうに思います。今日の出会いをこれからも大切にしていきたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。

〈今泉〉これは平成18年度の鳥川小学校の卒業生が校舎に書き残した壁画であります。今も閉校した校舎の壁にしっかりと残っております。ホタルが乱舞をしております。このような子どもたちの思いを私たちがしっかりと引き継いでいかなければならないと思っております。それが私たちに与えられた使命だと思っております。重ね重ねのお願いで申し訳ありませんが、どうか皆さん方のご支援をよろしくお願いを申し上げます。以上で終わらせていただきます。長時間にわたりご静聴いただきまして大変ありがとうございました。



平成18年度 鳥川小学校卒業記念壁画 子どもたちの思いをしっかりと引き継ぎたい